

# 一貫教育の問題

宮井敏

教育制度論の立場からいうならば、包括的な学校教育制度のもとにある中学校なり高校なりの学校は、それぞれが独立した固有の目的をもちながらも上下級諸学校とのむすびつきにおいて教育体系の中に固定的にくみ込まれており、いわゆる「各種学校」をのぞけばそうした系列に対して超越的に存在する学校単位があるわけではないのである。したがって小学校から大学まで進学する場合について言うならば、六・三・三・四年、合計十六年間の学校教育というのは、立て前から言えばそれなりに「有機的に」「一貫して」いるはずであって、とりたてて「一貫教育」の必要性を叫ぶことはないわけである。ところが実際には、小、中、高校それぞれのカリキュラムこそ「一貫的に」編成されてはいても、それはややともすれば「指導要項」という文章の上だけの連関におわってしまうことが多く、地域差、学校差の問題がある上に、入学試験の存在が相互の緊密な連繫と信頼関係をそこなうということもあって、教育の現場で

はそれぞれの学校単位間のズレやギャップがだんだんと深刻なものとなって来ており、その円滑な調整がのぞまれつつも、次第にむづかしくなって来ているのが現状のようである。

では、そうした入学試験の問題がなくてすむ、また比較的、地域差、学校差のすくないとおもわれる私立の総合学園では問題はどうであろうか。そこではすくなくとも創立者の理想が統一した教育の理念としてかかげられ、同じ組織に属する単位として学園内諸学校間相互の連絡もおそらく充分であろうから、中学、高校、大学を通じての、それこそ一貫した教育がスムーズにおこなわれているはずである。ところがここでも問題は依然深刻であり、「一貫教育」という言葉だけが一種の精神的な目標として全学園のナショナルリズムを謳歌するために使われたり、それぞれの学校単位の全体に対する帰属意識を刺激するための標語であるにとどまっているようにおもわれる。

だいたい総合学園内部では、中学より高校、高校より大学と、上級の学校のほうが経営規模が大きいのが常であり、したがって例えば立っていて、それがまた、男子の中・高、女子の中・高、共学の中・高、夜間商業高校、女子の大学、共学の大学にわかれるという機構はたしかに全国的にみてもちよつと例のないほど完備したものであり、これらの学校単位をさまざまに組合せて進学するとすれば実にバラエティにとんだ十いくつかの種類の進学コースが出来るはずである。けれども反面、これらの諸学校が、法人本部を加えて七つの一応独立した経営体をなしているという点では、これまた全国にも例をみないほどの複雑な組織でもあるわけであって、学園全体がますますマンモス化するにつれてこのことのマイナスがとりわけ最近では強く表面化して来ているようにおもわれる。

ば中・高・大とエスカレーター進学をしてゆく学生についていうならば、そのうけた教育は（形の上からだけでも）一貫しているかも知れないけれども、それぞれの学校同志は必ずしも量的には対応していない、つまり大学の立場から言えば、学園内諸学校よりの進学者は入学者全体の一部にすぎず、下手をすると教の上では全体の中に埋没してしまうおそれがあるほど彼らに対して何らかの特別の配慮がほどこしい、という現状にある。そこへ、ますますマンモス化してゆく総合学園の内部では次第に学校相互、教職員相互の意志の疎通がむづかしくなつて来ており、またそれぞれが同じ一つの組織に属しているという最低限度の紐帯感もだんだんと稀薄になり、学園全体が一個の有機体として機能しなくなつてきているため、いうところの「一貫教育」ものぞむべくしてはなはだ心許ない有様になつていようである。

たまたま京都新聞への投書から端を發して同紙の「一貫教育特集」にまで発展した京都女子学園における同女子高校からの進学問題の場合でも、話にきく慶応義塾での学内高校からの進学問題の状況でも、さきへのべたいくつかの原因に加えて、学力選抜試験にかわる推薦入学制度が必ずしも有効に作用していないことなどもあって、私立総合学園における「一貫教育」とエスカレーター進学の問題は現実にはなかなか円滑には行なわれていないようである。

二

ひるがえって同志社の場合はどうであろうか。総合学園としては、一つの幼稚園、三つの中学校、四つの高校、二つの大学から成

用して来た面が少なくないと考えられるのである。

例えば創立者のかかげた教育の理念はたしかにすぐれたものではあろうけれども、それぞれの学校における教育の現場でそれを具体化していく場合、各校の自主的な教育活動に委ねるといふ形で実際には統一した見解がないままに、まちまちの理解なり具体化なりが

行なわれて来た。したがっていうところの新島精神が精神的紐帯として必ずしも有効に機能していないということが考えられる。また傘下諸学校が、それぞれ独自の設立事情と固有の歴史をもつという点も学園がマンモス化して来ると、一種の多中心的なナン・ナリズムが発生し、そのことがまた理事会の指導性を弱める結果となり、全体を統一する強力な方針が確立しにくい状況が生まれて来る。加えて、実務担当者の意見を十分に汲み上げないという不思議な習慣から、教育の現場の様子を把握しないままに次々と方針がうち出されるから、末端では混乱と上層部不信の風潮が生まれ、そこから非能率と渋滞がおこるといふ結果になる。また入学試験のもたらすさまざまな弊害を除くことの出来るはずだったせつかくの推薦制度も、そのことのプラスマイナスを一番よく知っているはずの送り出す側と受け入れ側の実際の担任同志の十分な話し合いが行なわれないうままに、折衝面での一種の政治的かけ引きにおわってしまうことが多く、場合によっては、誤解から生ずる摩擦や不信感や対立感情が本来的なこの制度のよさを生かすことを阻んでおり、「一貫教育」どころか、おたがいが同じ組織に属しているという最低限度の連帯意識すらはなだ心許ない有り様となっているのではなからうか。

それもこれも、しょせんはマンモス化の仕業であろう。マンモス化して来たからこそ必死になって「一貫教育」の必要を叫ぶのか、「一貫教育」が行ない得なくなつたから有機体が緊縮性を失つて無意味な膨張が始まったのか、いずれにせよ、拡大政策を決定するそれそれぞれの時点において現状に対する徹底した分析と反省がないままに、ただ量的にのみ「ふやして」来たことの結果が、今ここにあ

る。しかも不幸にして多くの私学の場合、この膨張エネルギーをチェックする因子は皆無と言ってよい。経営担当者とはともかく経営規模を拡大すれば当面金操りの苦しさから一時的にもせよ免がれるし、第一緊縮財政よりはいわゆる「積極財政」のほうが景気もよいし下部の受けもよろしい、昔ながらの同志社人は、何しろ創立者の理想にしたがって学園が発展してゆくのだからこれほど結構なことではない、戦争中のある火の消えたような学園から今日の隆盛ぶりを見ればうたた今昔の感にたえず、ただただ随喜の涙を流さんばかり、組合は「家庭の事情」があつて、ちょっとでも当局に収入減の口実を与えたくないことから財政規模の拡大についてはまず横目でにらむ程度、あえて火中の栗は拾おうとはしない。そこへ、殺到する受験生の数、その意味する社会的要求、これに応えるという大義名分、私学の使命、教育の機会均等、何もかもが一緒くたになつて、そして大方の社員は何が何やら訳がわからず、暴れ神輿をかっいでいるような有り様でただもう振り飛ばされまいとしがみついているのがせい一杯で、どこへゆくやら、前が川やら地獄やらさっぱりわからん、というのが現状なのではなからうか。ああ「一貫教育」よ、どこへ行つた。

### 三

だが希望がない訳ではない。抽象的で漠然とした「一貫教育」よりも、具体的な教科の上での諸学校間のむすびつきの中にその可能性をさぐるという試みがそれである。昨秋の教育懇談会で「同志社の英語教育」がとり上げられたことは、出席者数が異例に多かつ

たことからもうかがえるように、マンモス学園の中にあつてとだえがちな意志の疎通と相互の理解をもとめる願いの意外と根強いことを物語っている。こえて十一月三日、同志社英文学会は恒例の年次大会で「同志社における英語教育の一貫性」をシンポジウムのテーマにとり上げ、学園内諸学校からそれぞれ担当者が具体的な教科の上での一貫教育の可能性をさぐるかと試みた。

遺憾ながら、いずれの場合も、スピーカーの主観的な熱意にもかかわらずこの問題がいかに困難ではほとんど不可能に近いかという

とや、膨大な機構の中で個人や小人数のささやかな熱意などは埋没してしまふのではないかという無力感の再確認におわつてしまつたかにみえる。事実それほどにも、話し合つてみると、こまかな誤解が集積していたり、意志の隔絶がぬき難い不信感を生んでいたり、機関相互の折衝の上で責任者がいかに無責任であつたり、実務担当者の意見が汲み上げられていなかったりしていたことがよくわかるのである。けれども、このエネルギーは貴重である。観念的な議論ばかりにおわらないで、遠距離射撃の目標は設定しても、今のこの一歩をどちらに向つてふみ出すかはなかなか教えてくれない同志社評論家諸先生の助けは求めないで、具体的な問題の中に可能性をさぐるという動きは高く評価されなければなら

ないし、また後につづかなければならぬであろう。

聞けば、マンモスという古生物は、自分の身体が大きくなりすぎて、脳髓からの伝達では間に合わなくなり、背椎に副脳髓が出来て神経系統の中継をしていたのが、それでも間に合わなくなつて、ついに死滅してしまつたという。マンモス都市東京、新宿副都心、という言葉をみるたびにこのことを思い出すし、今出川、岩倉、香里、田辺とならべるたびにこのことが頭に浮かんで来る。有機体には拡大の適限があるし、それをこえると有機体でなくなる、つまり生命がなくなる。ねがわくば、言わずして「一貫教育」がおのずから存在し、語らずして理念の一貫する学園となる日の来らんことを。そして同志社がマンモスとして死滅せざらんことを。

(商学部教授・英語)

